

DXをどう進める？ ～変革というチャンスとの向き合い方

ジャパンSAPユーザーグループ(以下、JSUG)は、SAPユーザーが自ら運営するユーザーコミュニティとして1996年に発足。その会員数は2020年4月現在で約570社を超えます。富士通は、JSUGの活動に貢献した企業を表彰する「JSUGアワード」の2019年度表彰において、前年度に続き「ベストサポーター賞」を獲得。今回はJSUG会長を務めるトラスコ中山の数見篤取締役とのセッションの機会を得ました。富士通からは、CIO兼CDXO補佐を担当する執行役員常務 福田譲と、EBAS*事業本部の本部長を務める理事 齊藤幹人が参加し、戦略企画統括部長 中江功をモデレータとして、DX(デジタルトランスフォーメーション)とその推進基盤となるERPなど基幹システムについて、忌憚のない意見を交わしました。 *EBAS：エンタープライズ・ビジネス・アプリケーション・サービス

DXの価値はどこにあるのか？

中江：数見さんはJSUG会長という立場から、DXについて様々な企業からご意見や動向をお聞きだと思います。

数見：JSUGには日本を代表する企業が多数参加していますが、DXに対し「何のためにやるのか?」「現状の強みをどう生かすか?」など疑問が尽きず、迷路に入っている状況が見られます。私は難しく考えるのではなく、各社の強みをさらに発揮し、社会にとって価値ある企業へと変革していくことがDXの役割だと考えています。

福田：富士通を含め多くのデジタル社会以前に誕生した“ビフォアデジタル”の企業は、ビジネスモデルから仕事の進め方まで“アフターデジタル”に切り替えるべき時期を迎えています。デジタル社会では、粒度の良いリアルタイムデータを容易に入手、将来の市場動向をつかむことができます。非常に面白い時代であり、それだけ時代が変化している中で、従来のままでよいはずがないと思います。

数見：ただし、現実には「私はそこまで考えられない」という会社が多くありますので、JSUGの活動の中に、社会環境とともに変化しなければならないという意識付けを盛り込んでいくことが大事でしょう。

齊藤：D(デジタル技術)とX(変革)のどちらが大切かというところ、やはりX。変革することが目的であって、変革を実現するための手段として技術があります。ただし、技術だけではなく、エンジンも必要になりますので、変えていく“面白さ”や“楽しさ”を変革へのモチベーションにつなげていくことも重要ではないでしょうか。

DX推進に際しての課題とどう向き合うか

中江：変化に対して苦手意識を持っている人も多く、社内には変革を受け入れられないという人もいるかもしれません。それがDX推進の向かい風になるのでは？

福田：変革に抵抗感がある人もいるという前提のもと、いかに



数見 篤 (Atsushi Kazumi) [写真中央左]
ジャパンSAPユーザーグループ 会長
トラスコ中山株式会社 取締役
デジタル戦略本部 本部長、兼デジタル推進部 部長

福田 譲 (Yuzuru Fukuda) [写真中央右]
富士通株式会社 執行役員常務
CIO (最高情報責任者)、兼CDXO (最高デジタル変革責任者) 補佐

齊藤 幹人 (Mikihito Saito) [写真左端]
富士通株式会社 理事
EBAS事業本部 本部長、兼EBASグローバルヘッドオフィス 室長

中江 功 (Isao Nakae) [モデレータ/写真右端]
富士通株式会社 EBAS事業本部 戦略企画統括部 統括部長

変革への意思を全社で共有するかが問われます。そこで決め手になるのは、変わらないデメリットを訴えるよりも、ワクワク感や、自分たちは何を成し遂げたいのかという「目的意識」ではないでしょうか。

数見：変革のメリットを理解するという意味では、社員一人ひとりがデジタル技術で何ができるかを知り、日々の仕事で抱えている課題に結びつけることが大切になります。

福田：IT部門が社内のドラえもんのような存在になり、IT部門に相談すれば解決策を示してくれるというような距離感、信頼関係を育てることが重要になりますね。

数見：ドラえもんのポケットの中にどのような道具が入っているのか、社内の各部署に興味を持たせるのもIT部門の大切な仕事です。このような道具があると分かれば、感度の高い人は「こう使えるのではないかと」と使い方を見出せる。そのような意見が集まれば、IT部門にとっても刺激になるでしょう。

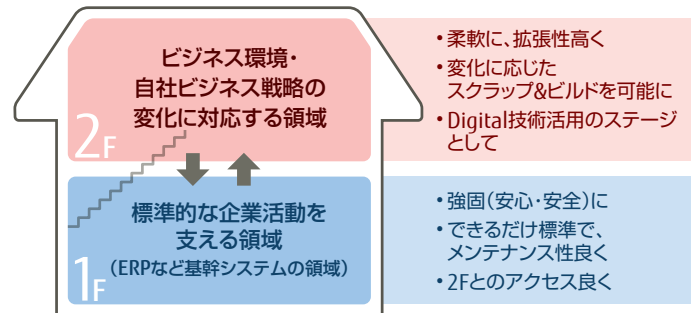
斉藤：富士通はまだドラえもんになり切れていない部分もあるので、まずは自ら道具を活用して変革するという経験を積むことが大切だと思っています。

DX推進を支える基幹システム(ERP)の方向性と役割

中江：DXを推進するうえで、ERPなど、基幹システムはどのようなトランスフォーメーションを実現する必要があるのでしょうか？

斉藤：基幹システムのトランスフォームにあたっては、作り込んだアドオンをどう移行するのか、その際に、今後のアップデートにどう対応させるか、といった課題が生じており、富士通にとっても重要なテーマになっています。そこでキーワードとなるのが「Core Clean」、つまりコアとなる基幹システムは極力いじらずクリーンなままにして、アドオンは外部に連携させるという手法です。

福田：社内の情報基盤を家に例えると、基幹システムは1階、DX推進に向けて試行錯誤していくのが2階に当たります。2階が必要に応じたスクラップ&ビルドが可能、かつリソースを投入しやすい環境となるよう、1階はシンプルで強固な構造を



維持できるよう、できる限り標準で利用する。このように、今後はシステムの1階と2階をどう工夫して作り分けるかが重要になっていきます。

斉藤：骨格となる1階部分にはグローバルな対応力を持った基盤を導入し、企業の競争力を左右する2階部分には先進のデジタル技術や課題解決の経験など、私たちが培ってきたアセットを注ぎ込み、各社の強みが出せる建て付けを描いていきたいですね。

数見：やりたいことを見つけ、方針を決めるのはユーザー企業で行うべきですが、そのための情報基盤のデザインやアーキテクチャーについては富士通さんなどサポーターにお任せした方がうまくできる。そうした役割分担によってDXが進んでいくのでしょね。

JSUG会長から富士通へのメッセージ

中江：最後に、JSUG会長としての立場から、富士通に対するサポーターとしてのご期待をお話いただけますか。

数見：御社自身がDX企業として変革していくことに、多くの会員企業が注目しています。同じような課題を持つ企業も多いはずなので、御社が変革を通じて得た経験やノウハウをJSUGの中でシェアしながら、日本企業全体でDXを推進していくためのシンボリックな存在になっていただくことを期待しています。

中江：ありがとうございます。富士通がお客様や会員企業の皆様との協業を通じて大きなエコシステムを構築し、その中で存在感を発揮できるよう、今後もDXを強力に推進してまいります。

●SAP、記載されているすべてのSAP商品名はドイツにあるSAP SEやその他世界各国における登録商標または商標です。

記載されている商品名などの固有名称は、各社の商標または登録商標です。

●記載されている内容については、改善などのため予告なしに変更する場合がありますのでご了承ください。

お問い合わせ先

富士通コンタクトライン(総合窓口) **0120-933-200**

受付時間 9:00~17:30 (土曜・日曜・祝日・当社指定の休業日を除く)

富士通株式会社 〒105-7123 東京都港区東新橋 1-5-2 汐留シティセンター